

サレジオ同窓会連合創始者カルロ・ガステイーニの人生と働き

過去、現在、そして未来の同窓生諸君へ

1. イントロダクション

『さて、今まであなたのために多くの書物を製本してきましたが、この私もあなたとともに人生という名の書物と一緒に綴じ付けられるのかもしれませんがね』霧の街、トリノへの旅のある日、サレジオ修道会の母なる家、ヴァルドッコにおいて、私はこの言葉が書かれているを見つけました。

カルロ・ガステイーニについて語る時、私たちはあるパラドックスから出発する必要があります。実際のところ、全ての同窓生はサレジオ同窓会連合の創始者であるこのイタリア人について耳にしたことがあるでしょう。床屋、ハートの銀細工、そしてコーヒーカップの逸話は何十年にもわたって何度となくサレジオ会の機関誌に載ったものです。しかし同窓生たちは、彼自身の生涯、彼自身の業績、あるいは彼自身の性格については誰一人、何一つとして知らないのです。それはそれについて語ってくれるものが誰もいなかったからです。

事実、サレジオ同窓会連合はサレジオ家族の中で創設者の伝記をもたない唯一のグループでした。驚くべきことではありませんが、とても重要なことです。

2. ドン・ボスコの若き吟遊詩人

2.1 トリノ、0年

トリノの歴史は、19世紀にヨーロッパに大きな影響を与えた大変動の一例です。それはフランス革命後の西洋文化におけるキリスト教信仰の主導権の瓦解、絶対君主制に徐々に取って代わった新しいリベラル・モデル、そして産業革命によってもたらされた社会経済的変化の結果として生じたものでした。

1841年、若きドン・ボスコがトリノに到着した時、街の人口は1800年から2倍に増えていました。スチームによる機械の力が、伝統的な鋼鍛造を倍増

させ、機械産業が興り、19世紀の終わりにはフィアットやランチアの誕生を見ることとなります。壁は崩され、パリを模して建てられたエレガントなブルジョア階級の地区の前には2本の川沿いに郊外地区が出来ました。即ち、ドラ川沿いのヴァルドッコと、ポー川沿いのヴァンキリアです。どちらも川のカ〜水力を利用するためでした。

水に加え、この巨大な産業地帯は（フランスの銀行からの）資本と（ピエモンテの田舎からの）労働力とを必要としていました。現在と同じように、全員にいきわたるほど仕事がないということ、不安定であること、そして街での生活は郊外にひしめき合って暮らし、自然社会の価値を歪めてしまうものであることが明らかになると、夢はすぐに悪夢へと変わりました。自然、信仰、連帯の農村社会は、重商主義、反教会のフリーメーソン思想、そして欲望のままにふるまう自由という都市の現実によって打ち消されてしまいました。

若きドン・ボスコが1841年にトリノに到着した時、建設作業員、仕立て屋、大工、ペンキ屋、煙突掃除屋などで雇われ、1日当たり最大14時間も働いている10歳以下の子どもたちが7,148人いました。郊外地域に暮らす人々の置かれた社会的疎外の状況や厳しい労働条件は、アルコール依存症や虐待、病気などにつながり、結果として多くの子どもたちが孤児となりました。仕事がないことから犯罪に走り、トリノの監獄は若者たちでいっぱいになりました。彼らのほとんどはLa Generala（1847～1944）として知られた矯正センターにいました。多くの者がRondò de la Forca（絞首台広場）で死刑に処せられました。

通りを歩き、刑務所を訪問し、カファッソ神父について死者の看取りを手伝いつつ、若き神父は強い感銘を受けていました。彼は、目的は違えど彼と同じようにピエモンテの田舎を離れ、トリノの首都にやってきたこれらの若者たちを自分と重ね合わせずにはいられませんでした。

2.2 孤児の若者

同じようにアントニオ・ガステイーニとマリア・ペルニゴッティの夫婦は、1828年頃カザーレ・モンフェットラートを離れ、トリノに定住しました。

ガステイーニ一家は、市街中心部の町はずれにあるサン・ダルマッツォ教会

の隣に落ち着き、アントニオ・ガステイーニはトリノ市警察に職を見つけました。男の子二人と女の子一人という彼の3人の子どもたちがトリノで生まれたのはこの頃のことです。まずマルコが1830年に生まれました。カルロは1833年1月23日に生まれ、25日にサン・ダルマッツォ教会で洗礼を受けました。

一家の幸せは長くは続きませんでした。一家の大黒柱である父親は、1847年に3人の子どもたちをマリアに残して亡くなってしまいました。子どもたちのうちの2人は働かなければなりませんでした。家族の中ではカルリーノとかカルッチョと呼ばれていた14歳のカルロは、アッシジの聖フランシスコ通り11番地近くにあった近所の理髪店の徒弟としての働き口を見つけました。

2.3 オラトリオのティーンエージャー

1847年前半、彼の人生は摂理的に変わりました。その年の6月5日、12日、19日、もしくは26日の土曜日に若き神父であるドン・ボスコが理髪店にやってきたのです。ドン・ボスコはそのわずか1年前に母親のマルゲリータ・オキナエと共にフィリッポ・ピナルディから借りた簡素な小屋に引き移ってヴァルドッコに住み着いたばかりでした。そして彼がヴァルセージア出身の若者を受け入れてオラトリオでの自らのミッションを開始したのはほんの1か月前からのことでした。ドン・ボスコはカファッソ神父とともに倫理神学を学ぶため、毎日アッシジの聖フランシスコ学院に通っていました。ある日、ドン・ボスコは髭を剃ってもらうためにトリノのある理髪店を訪れました。そこで彼は一人の徒弟と出会い、いつも通りにすぐ彼と話をし、彼の日曜日のオラトリオに来るよう説き伏せました。

カルロは約束を守り、次の日オラトリオに行きました。それは1847年の6月6日、13日、20日もしくは27日の日曜日でした。以降、生徒として、寄宿生として、労働者として、活動家として、ガステイーニは1897年までの実に50年間にわたってオラトリオに参加するようになります。

1847年の最後の数ヶ月、彼の母マリアは病を得て亡くなりました。彼の兄のマルコは兵役に就いており、第一次独立戦争(1847-1848)でピエモンテ軍に加わって戦っていました。カルロと妹は世界にたった二人で取り残されてしまったようなものでした。

その冬のある夜、ヴァルドッコに戻る途中で、ドン・ボスコは摂理的に彼とその妹を見つけました。妹はロンド・デ・ラ・フォルカの近くにあるヴィアーレ・サン・マッシモ（現在のコルソ・レジーナ・マルゲリータ）の楡の木のそばでシクシク泣いていました。カルロは、母親が亡くなり、彼女が病気の間は家賃を払うことができなかったので、家主が彼らを追い出し、通りの真ん中に置き去りにしたのだ、と妹に説明していました。

彼の兄が兵役に就いている間、彼の妹は一時的にカザーレ・モンフェッラートの孤児院に預けられました。後に彼女はそこで亡くなります。

カルロは通学生からオラトリオの最初の寄宿生となりました。彼の後には、いつかオラトリオの壁を飛び越えることになるフェリーチェ・レヴィリオと、ドン・ボスコがジャルディニエラ通りで出会ったジュゼッペ・ブッゼッティが続きしました。全ては同じ 1847 年のことでした。ガステイーニはレヴィリオ（1831 年）やブッゼッティ（1832 年）よりも若く、ジャコモ・ベッリア（1833 年）と同年で、ミケーレ・ルア（1837 年）やジョヴァンニ・フランチェジア（1838 年）、ジョヴァンニ・カリエロ（1838 年）より年上でした。彼らは後に生涯の素晴らしい友人となります。

朝のミサとロザリオの祈りの後、彼らはポケットにロールパンを突っ込んで街へ働きに出かけました。昼食と夕食には戻ってきました。ドン・ボスコの母親の家庭菜園で取れる野菜のシチューと野菜だけの食事は、ささやかなものではありましたが、以前の暮らしに比べればよほどましでした。若者たちはドン・ボスコと一日を過ごし、そしてドン・ボスコは日々の必要をすべて満たしてくれました。

1848 年はドン・ボスコがヴァルドッコで窓から撃たれた年ですが、その年のある日曜日、カルロ・ガステイーニはひどい歯痛を起こしました。そしてドン・ボスコは彼の上に手を置くことで、それを治してくれたのでした。

これらの若者たちはドン・ボスコに心から感謝していたので、彼のことを本当の父親のように思っていました。1849 年 6 月 24 日、ガステイーニとレヴィリオが市内でも最高級の宝石店で購入した 2 つのハートの銀細工をドン・ボスコに贈った時、彼らは賞賛と感謝と愛情のしるしとして彼に贈りものをしたと考えていたのでした。

2.4 サレジオ会修練者

ドン・ボスコは、彼の事業に広がり、自由、継続性を与えるために、後にサレジオ会となる修道会を設立する可能性をすでに考えていました。彼は1848年の政治的迫害もメディアによる迫害も、また同じ年に、オラトリオでの彼の助手何人かがやめて出て行ってしまったことも忘れてはいません

でした。このため、1849年7月23日、彼は新しいカテキストを育成するために1週間にわたる黙想会を2回行いました。2つのオラトリオに来ている800人以上の若者の中から、彼は71人を選びました。その中には、ブゼッティ、ベツリア、レヴィリオと共に最終的に選ばれたガスティーニもいました。

ドン・ボスコは、彼らに衣食住を提供するとともに、彼らが秘跡に充実してあずかれるようにしたり、彼らにイタリア語やラテン語の文法を教えたりしながら、彼らが道徳的に行いを改める手伝いをしました。彼らはヴァルドッコでドン・ボスコを助け、日曜日には彼に従ってポルタ・ヌオーヴァやヴァンキリアに行きました。1849年11月1日、彼らはドン・ボスコの栗の奇跡を目の当たりにすることになります。

1851年2月2日、カルロはついにカソックを身に纏うことができるようになりました。それは嬉しそうに顔を輝かせたドン・ボスコ自身の手で彼に着せかけられました。

「晴れがましい。最初の子羊たちがついに羊飼いになろうとしているようだ」

次の日、新たに神学生となった彼らは哲学の勉強を始めました。またサレジオ劇場もスタートさせました。ドン・ボスコはガスティーニにサレジオ劇場を任せ、また通いの生徒たちのためのカテキズムのクラスも任せました。

しかし1852年10月12日から11月24日にかけて、カルロは修練院を去らなければなりませんでした。それは彼自身が決めたことでも、ドン・ボスコが決めたことでもありませんでした。カルロには僅かですが吃音があり、そのため当時の教会法の下では叙階も誓願もできないことになっていたのでした。

2.5 製本チーフ

以降 4 年間、カルロ・ガステイーニは寄宿生としてオラトリオに住み続け、1854 年から印刷所のアシスタントを務めることとなります。その年、トリノではコレラが流行しました。ドン・ボスコが病人を助けている間、ガステイーニはヴァルドッコにとどまり、誰も感染しないように祈っていました。

印刷と劇場は二つとも、人生の新しいステージを迎えたカルロ・ガステイーニのヴァルドッコにおける仕事でした。彼が髭を伸ばし始めると（以前の神学生としての立場では許されていませんでした）、半ば尊敬を、半ばほほえましさを覚えさせる彼の外見が引き立つようになりました。

2.6 家族の父

カルロ・ガステイーニの個人としての成長は、次第に彼を新しい人生の創造へと導いていきます。ドン・ボスコおよびヴァルドッコとの関係は保ちつつも、すでに自分で生計を立てられるだけの職能を身に付けていました。彼は市内の印刷屋に仕事を見つけ、1856 年にはジュゼッパ・ロラと結婚式を挙げました。司式したのはドン・ボスコ自身でした。新しい家族、新しい家、新しい仕事を得ながらも、ガステイーニは決して祝祭日を逃すことはなく、いつでも助っ人に飛んでいきました。

他の仲間と同様に、ガステイーニはドン・ボスコがいかに預言の賜物をいただいていたかについて多くの事例を目にしていました。1860 年 5 月初旬、カルロはドン・ボスコに、あとどれくらい生きられるか、と尋ねました。ドン・ボスコは「70 歳までだよ」と彼に言いました。

1861 年、オラトリオは世間から新たな迫害を受けて苦境にありました。ガステイーニは高給の仕事をなげうち、ヴァルドッコで製本部門の長として働くために戻ってきました。その後、彼が決して離れることのなかった仕事でした。目的は彼の第二の父の出来る限りそばにいたことでした。新しい印刷所はその年の 12 月 31 日に発足しました。その同じ年、彼の霊名日の

ために、カルロはドン・ボスコのところに優美に綴じ付けられ、そしてそれ以上に優れた献呈の辞を添えた本を何冊か持っていきました。

「さあ、私は今まであなたのために多くの書物を製本してきましたが、この私もあなたとともに人生という名の書物と一緒に綴じ付けられることを願って」

1863年に彼の娘フェリサが誕生しました。ヴァルドッコではみんなフェリチーナと呼んでいました。洗礼はドン・ボスコ自らが授けました。

ガステイーニは引退するまでサレジオ出版・印刷部門の製本チーフを務めました。彼は200以上の作品を制作し、そしてそれらは彼の時代における最も重要なイタリア語による書籍目録のひとつを形成しました。1877年から、彼はドン・ボスコによって創刊された『*Bollettino Salesiano*』の出版を始めました。ドン・ボスコは亡くなる前年の1887年まで、積極的に出版に関わっていました。その名声の結果として、サレジオ出版部門はガステイーニの時代にバルセロナの万国博覧会(1886年)に招待されたのでした。

2.7 ガステイーニの死

1873年において、カルロは依然としてヴァルドッコでの祝い事を中心でした。彼がヴァルドッコを離れてから20年近く経っていましたが、いまだにパパ・ジョヴァンニ(ドン・ボスコ)の日々の暮らしになくってはならない存在でした。1875年にドン・ボスコが見た夢(不思議な馬の夢、もしくは熊手の夢)の中にガステイーニとブッセッティが出てきたのは決して偶然ではなかったのです。

1876年4月29日、ジュゼッピーーナが36歳で亡くなり、フェリチーナはFMA(サレジアン・シスターズ)の元で教育を受けることになり、その後1893年5月7日にマルコ・ガステイーニの5人の子どもの末っ子である従兄のエウジェニオと結婚しました。実は、同窓会の依頼により、ヴァルサリーチェにドン・ボスコの最初の墓を建てることを任されたのはヴィチエンツォ・ガステイーニでした。

ガステイーニとレヴィリオはヴァルドッコの中の一つの機関と言ってもいいくらいでした。1894年、彼のかつての同僚であるジュゼッペ・ロリー

ニが、扶助者聖母大聖堂の聖フランシスコ・サレジオのチャペルに彼の絵を描きました。

1 年後、孫娘のローサが誕生しました。誰もがガスティーニの人生の終わりが近づいていることを知っていて、彼が活着している間に何らかの方法で彼に敬意を表そうとしました。1898 年 6 月 23 日、彼はまだオラトリオの内輪の祝いに参加していました。しかし終わりが近づいていました。ドン・ボスコが亡くなって以来、何かが変わってしまいました。彼はまるで自分が孤児になったかのように感じていました。

1902 年 1 月中旬、カルロは病に倒れました。ドン・ボスコの預言があったので、彼は死の準備をしたいと思います。多くの見舞い客が彼を元気づけようとしたが、ある日、彼はミケーレ・ルア神父にこう言いました。『私はベッドから出ないよ。もう 70 歳だからね、死ななければならない。ここではもうこれ以上何もすることはない。ドン・ボスコが、私が天国で彼と一緒にいるのを手伝ってくれることを願うよ』(ボレッティーノ・サレシアーノ、1902 年、第 2 号)。

そしてその通りになりました。カルロは親友のミケーレから終油の秘跡を受けた後、1902 年 1 月 28 日に亡くなりました。パパ・ジョバンニ（ドン・ボスコ）が予告したように、ちょうど 70 歳になった時でした。

ガスティーニ一家は、ローサ・ガスティーニが 1 月 11 日に亡くなる 1973 年までトリノに住み続けました。ローザには子孫はありませんでした。今日、カルロ・ガスティーニの直系の子孫は、ピエモンテのアレッサンドリアに住んでいます。彼らは、ローザの弟エマヌエーレと彼の妻ローサの曾孫にあたります。その中には女優のマルタ・ガスティーニもいます。彼女は、1851 年に先祖のカルロ・ガスティーニが先鞭をつけた一家の芸術、演芸とのつながりをいまも保っているのです。

3. サレジオ同窓会創始者

3.1 オラトリオの精神を維持する

家族のことに加え、カルロ・ガスティーニの素晴らしい業績はサレジオ同窓会運動の創設でした。1849 年 6 月 24 日に、ガスティーニとレヴィリオガド

ン・ボスコに2つの銀のハートを贈ったことはすでにご承知の通りです。

その後、ドン・ボスコに贈り物をするために寮生や通学生から寄付を集める委員会が立ち上げられました。1850年、彼らはドン・ボスコの部屋の下に集まり、小さなコンサートでお祝いしました。その後、グループの代表がドン・ボスコへの贈り物を持って上がって行きました。ドン・ボスコはバルコニーから感謝の意を表して、皆から大きな拍手を受けました。

次の年は、音楽に加え、手紙の朗読と詩の朗読が行われました。そのうちのいくつかは、感謝を表すこの機のために作られたものでした。この努力は間違いなく、彼らがオラトリオで受けた修辞学、ラテン語、イタリア語の授業の結果として生まれたものでした。ドン・ボスコは、生徒たちが自分たちの受けた教育のゆえに人から笑われたりすることがないように、彼らが尊厳あるふるまいができるようにしたいと考えていました。多くの者がこの機会に彼にアドバイスを求めたり質問したりしました。

1858年以降、これらの祝いは聖フランシスコ・サレジオ教会の下に造られた食堂で開催されるようになりました。1866年からは旧『フィリッポの家 (Casa Filippi)』の3階に移りました。1886年からは劇場で行われるようになりました。現在の劇場と同じ場所です。

3.2 自発的な集まり

1869年3月7日、ピオ9世はサレジオ修道会の設立を承認しました。そのため、1870年のお祝いは特別なものになりました。カルロ・ガステイーニはサン・ドナート通りの角にあるスタウト広場に同窓生たちを呼び集めました。同窓生たちは6月24日にヴァルドッコで会い、自分たちが受けた教育に対して感謝の意を表し、ドン・ボスコに贈り物としてコーヒーセットを持っていきました。ドン・ボスコは彼らに白ワインをふるまった後、こう言いました。

「今日はみんなを昼食に招待することはできないが、次回はぜひそうしよう」

そしてその言葉通りになりました。1871年から、同窓生たちは毎年ドン・ボスコの霊名日を祝うために集まるようになりました。

1873年のお祝いは、ちょうどドン・ボスコの部屋と礼拝堂が置かれることになる最上階と、今日私たちが知っているように、下のポルチコ（柱廊式玄関）

の建設作業が完了した時でした。現在私たちが知っているような形です。

最初の段階は終わりに近づいていました。贈り物は、在校生にとっての個人的なもの（1849年）から共同的なもの（1850-1870年）となり、年長の生徒たち、というよりOB、同窓生たちにとっての、ヴァルドッコの内部的なものではなく外に開かれたもの（1870-1873年）へと変わりました¹。

3.3 ひと時の抱擁を長い旅路に変える

1874年から彼が亡くなる1888年まで、ドン・ボスコは彼の霊名日に向けられた敬意に対し、兄弟愛に満ちた昼食会でお返しをしてきました。これは、同窓生と過ごすために丸一日が取っておかれたということの意味しています。サレジオ会は1859年に設立され、扶助者聖母会（サレジアン・シスターズ）は1869年に設立され、そしてサレジアニ・コオペラトーリは1876年に出来た、ということをおぼえておきましょう。

1875年は特別な年でした。というのも、ジョバンニ・カリエロ神父率いるパタゴニアへの最初の宣教団が送られた年だったからです。その年、贈られたのは黄金の聖体顕示台でした。

1876年には初めて、同窓会の会長としてのガスティーニへの言及があります。4月24日のルア神父およびラゼロ Lazzero 神父への連絡の中で、ドン・ボスコはガスティーニのことを『外部の人間で、製本の師匠であり、同窓会の会長』と述べています（MB XII、198; MBe XII、175）。2日後、同じ人々とのやりとりの別の手紙の中で、彼は引き続き『ガスティーニとその友人たち』について触れています。

1877年、ブエノスアイレスの大司教がお祝いに参加し、カルロにコインを1枚渡しました。カルロはそれをドン・ボスコに渡しました。ガルシア・ズニガ（García Zúñiga）が受け取ってほしいとこだわったのに対し、カルロは歴史に残る次のような名言でこう答えました。

「私たちはここではみんなドン・ボスコに属しています。私たちのものはなに

¹ 1877年のお祝いでは、スペイン語の表現は維持されたが、イタリア語では維持されなかった。イタリア語では、anticchi allievi（古い学生）という表現が ex allievi（同窓生）に置き換えられた。

ひとつとしてありません。みんなドン・ボスコのものなのです」

それは特に、同窓生出身の司祭であるヨハネ・トゥルキ神父によるスピーチにおいて、初めて「8年前に誕生したオラトリオの同窓生たちによる会の先頭に立つ」ガステイーニが委員長を務める委員会について…云々と言及があったことは意味深いことです。「サレジオ会のオラトリオの同窓生の会」についての話が初めて出たのです。

3.4 ムーブメントに法人格を与える

1870年に同窓生を集めるイニシアチブは機能していました。会議は定期的で開催され、ますます多くの人々が参加しました。会が法人になったのは1894年のことでした。

ドン・ボスコとの年に一度の昼食会は恒例となっていました。1878年の昼食会は8月4日にヴァルドッコのポルチコ（柱廊式玄関）の下で行われました。194人の同窓生が出席しました。ドン・ボスコは同窓生たちに挨拶の言葉を述べ、法人を設立するように勧めました。

「他に何か言うべきことは残っているでしょうか？ いつも快活に、いつも喜んでいなさい cheer up !

その精神が保たれ、一人一人が今や仲間内での宣教師になってくれるだけで十分です。それから、自分自身の家で、あるいは住んでいるところで、良い模範を示し、良いアドバイスを与え、自身の魂にとって良いことをしましょう。

ちょうど今私は今年始めたいと思っているプロジェクト、つまりお互いに助け合う相互扶助というプロジェクトに夢中になっています。今日、人々は信用組合や互助会についてよく話しますが、私たちはこれを自分たちのために設立しなければなりません。これまでのところ、これは単なるアイデアであり、まだ詳しい調査もしていないプロジェクトなのですが、非常に実現可能なアイデアだと思います。

病気や失業などの緊急事態に対処できるよう、皆さんは多かれ少なかれなんとか貯蓄をしておきますね。私はあなた方が自分だけを利するのではなく、緊急時にはオラトリオの同窓生やかつての学友たち、ここにいる全ての人たちにも支援の手を差し伸べることを提案したいと思っています。毎年、あなた方は

ドン・ボスコのために小さな募金をしてくれませんが、私は喜んでそれを放棄し、そして貧しい若者たちを助けるためにそれを使ってほしいと思っています。

さて、ではこの家族の集まりでまた、できれば何度でもお会いしませんか？ 壮大で強く結ばれたひとつの大きな家族を天国に作りませんか？ 私たちの誰もがその会合に必ずあずかるという私たちの言葉を述べて、今誓約しませんか？」(BM XIII、582-583; MBe XIII、643-645)。

1878年のこの時のこの言葉が、そのままサレジオ同窓会のみことの使命憲章です。1869年、ドン・ボスコは「扶助者聖母の大信心会」を作り、1876年にはサレジアニ・コオペラトリーを設立しました。目的ははっきりしていました。オラトリオを超えたところでオラトリオを継続していくこと、すなわち、若者たちが成長した暁に同じ価値観を保持していけるようにすることです。これを達成するために、ドン・ボスコは4層重ねのミッションを立ち上げました。

- 受け取った価値観の維持（信仰、誠実さ、勤勉さ、コミットメント）
- これらの価値観の証し人（家庭、職場、または社会において）
- 同窓生間の相互連帯
- 若者たちとともにあるサレジオ会のミッションの支援

この場合、部品の順序は製品の出来上がりに影響をおよぼします。

サレジアニ・コオペラトリーの半聖半俗の性質とは異なり、ドン・ボスコはこの新しいムーブメントには、はっきりと在俗の性質を与えました。これは一見同窓生たちをサレジアニ・コオペラトリーとは切り離すかのようでした。しかし、「扶助者聖母の大信心会」とは違い、これには明らかに社会的性質もありました。

同窓生たちは既にヴァルドッコにおける現実でした。このことは、1879年、ボレッティーノ7月号で、ドン・ボスコのお祝いをオラトリオのOBたちが主導していたと伝えられている事実によって証明されています。

ドン・ボスコが年を取ってきていることが目に見えてわかりました。バルセロナから戻ったばかりの時、終わりが近づいているという直観が働いていたことは、彼の遺言めいた7月13日の言葉からも推測できます。

「ところで、どこへ行こうと、どこにいようと、あなた方はドン・ボスコの息子であり、オラトリオの子どもたちであるということ覚えていてください…

あなた方が若い頃に、私があなた方の心に刻み込もうとしていた真実をわすれないならば、祝福は皆さんと共にあるでしょう」(MB XVII, 489; MBe XVII,421)

「あなた方は小さな群れでした。群れは今や成長しました。素晴らしく成長しました。そしてさらに成長するでしょう。あなた方は世界を照らす光となり、率先して垂範し、善を行う方法、そして悪を憎み悪から逃れることを他の人々に教えるでしょう。あなた方がドン・ボスコの喜びであり続けると私は確信しています。最愛の子どもたちよ、私たちの主がそのお恵みで私たちを助けてくださいますように」(BM, Vol. 17: 149)

1887年8月16日、同窓生たちはドン・ボスコの誕生日を祝うことを決めました。前回彼が話してくれた言葉が、同窓生たちの耳から離れませんでした。

「しかし愛する息子たちよ、何よりもあなた方に勧めるのは、どこにいても常に良いクリスチャンであり、正直な市民として行動することです…あなた方の多くはすでに家族を持っています。ここオラトリオでドン・ボスコから受けたのと同じ教育を子どもたちに与えなさい」(BM Vol. 14: 401)

1888年1月31日、ドン・ボスコは亡くなりました。誰もが計り知れない悲しみを感じました。司祭、教育者、友人、恩人たち…誰もがその大切な存在を失いました。しかしカルロはパパ・ジョヴァンニを失ったのです。カルロは死の床にあったドン・ボスコに別れを告げに行き、その日のうちにガステイーニ会長は同窓生たちに手紙を送りました。

感謝の記念はすぐに始まりました。1889年6月4日、同窓生たちはドン・ボスコの墓の前で彼に敬意を表するため、ヴァルサリーチェに行きました。8月11日には、当時は甥のフランチェスコ・ボスコの所有となっていたドン・ボスコの生家で新たな銘板の除幕式を行いました。1891年には、守護天使の祭壇でのドン・ボスコの初ミサを記念するために、トリノのアジジの聖フランシスコ教会で銘板の除幕式を行いました。

取り分け注目に値するのは、1891年9月20日に行われたベッキ村への遠足です。オラトリオの設立50周年の時に、毎年夏にドン・ボスコと一緒に行った旅行を記念して銘板の除幕式を行いました。

ルア神父は晩年、かつての通学生もヴァルドッコの元寮生たちの輪に加える

よう主張しました。当然のことながらあと数年すればドン・ボスコと同じ運命をたどることになる、高齢化したオラトリオの最初の同窓生たちの小さくなっていく輪の中に全てを閉じ込めてしまうことを避けるためでした。1894年12月8日、ジョヴァンニ・ガルベローニの指導の下、オラトリオのかつての通学生たちを集めるための組織が設立されました。それは連合（Union）と呼ばれましたが、おそらくは寮生たちの組織（society）との区別するためだったのでしょう。頻繁な会合で彼らの霊的な面での福利を提供し、また彼らのニーズを支援して彼らの物質的な面での福利を提供し、彼らの間における友情の絆を更新することを目的とする、その会則が確立されました。

1896年、ルア神父の主宰で7月12日および16日に年次総会が開催されました。

「ドン・ボスコの同窓生：今日彼らを数えることができる者がいるでしょうか？彼らは世界中に広がっています」（Bollettino Salesiano、1896年、第8号）。

その年の献金は、第一次エチオピア戦争（1895-1896年）において、アフリカで虜囚となった仲間を解放しようとするためのものでした。

1900年1月20日、ルア神父はサレジオ会における同窓生の重要性について、初めて会員たちに手紙を書きました。

「ヨーロッパ、アメリカ、そしてアフリカのいくつかの街では、既に同窓会が設立されています。何年も前にトリノで設立された最初のものと言ってよい同窓会を模したものです」

彼はその会を、「サレジオ会活動の支部」と見なし、次のように結論付けています。

「こうした同窓会に対して、（私たちサレジオ会は）同窓生たちが若かったころ、私たちが彼らのためにそうしたように、守護の天使として私たちの生徒たちのために活動し続けるのです」

1900年のお祝いが記念の最後のものとなる予定でした。6月23日、マルティネット、サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ、ヴァルサリーチェ、サン・ベニーニョ・カナヴェーゼ、フォルッツォ、イヴレーア、アラッシオ、ランツォ、クオルニエの各地から集まった代表者たちがヴァルドッコで一堂に

会しました。その年の同窓会連合からの贈り物は、ヴァルサリーチェにある聖フランシスコ・サレジオ教会に、ドン・ボスコに捧げる記念碑を建てることでした。

ガステイーニの死後、新しい委員会が結成され、1901年6月24日にルア神父にお披露目されました。

サレジオ会が拡大するにつれて、同窓会も増えました。リール（1893年）、ヴァルドッコ（1894年、内外）、パルマ（1896年）、ニース（1896年）、マルセイユ（1896年）、ファエンツァ（1897年）、バルセロナ（1899年）、リエージュ（1899年）、ブエノスアイレス（1901年）といった具合です。

1908年、サレジオ同窓会国際連盟が誕生しました。その最初の目的は、1911年にサレジオ同窓会の第1回国際大会を開くことでした。

第一次世界大戦の勃発により、彼らの活動は第2回大会が開催される1920年まで休止となります。その大会でイタリア人のピエロ・グリバウディ（Piero Gribaudo）が会長に選出され（1919-1922年）、続いて彼の同胞であるフェリーチェ・マセラ（Felice Masera）が選ばれました（1921-1938年）。その年、同窓会は扶助者聖母大聖堂の正面に、ガエタノ・チェリーニの手になるドン・ボスコの記念碑を落成しました。

3代目の会長はアルトゥーロ・ポエッシオ（Arturo Poesio）でした（1938-1964）が、その間の1954年に同窓会国際連盟（International Federation）は同窓会世界連合（World Confederation）となり、その最初の会則は1956年に採択されました。それが、取り分け世俗の一般信徒たちの価値に重きを置いた第二バチカン公会議へと至る数年間であったことは、決して偶然ではありませんでした。新しい組織の先頭に立ったのはスペイン人のホセ・マリア・タバダ・ラーゴ（1964-1973年）で、その後はメキシコ人のホセ・ゴンサレス・トーレス（1974-1980年）、スイス人のジュゼッペ・カステッリ（1980-1992年）、ポルトガル人のアントニオ・G・ピレス（1992-2004年）、イタリア人のフランチェスコ・ムチエオ（2004-2015年）、スロバキア人のミハル・ホルト Michal Hort（2015-）と続きます。

1967年には、カトリック教育同窓生世界機構（World Organisation of Former Students of Catholic Education : OMAEC）の創設に加わり、1969

年にはドメニコ・サヴィオ・クラブの再編成の結果として、若い同窓生たちのグループ（GEX）が創設されました。

イタリア人のドメニコ・サヴィオは 1954 年に聖人となった初めての同窓生です。その他の同窓生では、東チモールのカルロス・シメネス・ベロ神父が 1996 年にノーベル平和賞を受賞しました。2013 年にはアルゼンチンの同窓生であるホルヘ・ベルゴリオがカトリック教会の最高位である教皇として選出され、教皇フランシスコとなりました。

今日、カルロ・ガステイーニの霊的な子孫は 100 か国以上に散らばり、5 千万人以上に達しています。

4. 結び

サレジオ会の会憲第 5 条には次のように書かれています。

「青少年の救いをめざして種々の方法で活動する人びとの幅広い一つの運動が、ドン・ボスコとともに始まった（…）卒業生は、サレジオ会教育を受けたという理由で、この家族に属する。卒業生がサレジオ会の社会に対する使命に参加するよう努めるとき、さらに緊密にサレジオ家族の一員となる。」

この作品は、サレジオ同窓会の創設者であるカルロ・ガステイーニの生涯を紹介することを目的としています。同窓会は、サレジオ家族の中で唯一世俗の一般信徒によって設立されたグループであり、その創設者の伝記はこれまでありませんでした。その理由はふたつあります。まず 1962 年以前の史料編纂上の聖職者主義の傾向、そして、ガステイーニ、レヴィリオ、ブッセッティ、ベリアの世代がカリエロ、ルア、アルティリア、またはロッキエッティの世代の陰に隠れてしまっていたことです。

カルロ・ガステイーニはその時代の人であり、問題と機会を認識し、彼の時代的手段（人気のある娯楽と社会的連帯）を駆使して、可能な限り前進することを提案した人でした。長期的で先見の明のあるビジョンを持って、第二バチカン公会議以前に一般信徒の神学を提案し、今日の、協力して働くことや事業の共有、機動性の共有や共同的な知識のはるか以前に、共同的な協力の形式を提案した人でした。1877 年には、人の価値に優劣などないこと（「私たちは皆、ここではドン・ボスコに属している」）と、全てのものが全ての人に属していること（「私たちのものはな

にひとつとしてなく、全てが彼のものである」) を明確に述べました。

ドン・ボスコの同窓生たちはサレジオ会やサレジアニ・コオペラトーリと協力して働きますが、サレジオ会士でもなければ、またコオペラトーリ会員でもないことは明らかです。

カルロ・ガステイーニはドン・ボスコに信頼を置き、ドン・ボスコのように働き、そしてドン・ボスコのように助けました。彼の人生は、信頼、喜び、連帯の人生へと彼を導いた摂理的な瞬間に満ちていて、脱工業化社会におけるサレジオ会の生徒たちのあり方に呼応する役割を感じ取り歩んだものでした。

「あなた方は世界を照らす光となり、率先して垂範し、善を行うこと、そして悪を憎み悪から逃れることを他の人々に教えるでしょう」(MBDB、Vol. 17 : 149)

カルロ・ガステイーニの人生、仕事、そしてカリスマは、この世界において献身を通じてサレジオの精神を生きるための招待状です。昨日と同じように、今日も彼は、私たちに心を揺さぶるようなやりがいを目覚めさせる問いかけをしています。

「あなた方は他の人のために何をする準備ができていますか？」